

甲奴郷土史だより

第23号
2021年9月
甲奴郷土史
研究会発行

甲奴中学校一年生 町内史跡めぐりの報告

鶴本節子

令和三年六月二三日(水)。緊急事態宣言が終り、毎年甲奴中学校一年生を対象とした、町内史跡めぐりが行われた。今回郷土史研究会から役員四名が四つの史跡の説明をし、正願寺では吉井住職よりお話しをしていた。だいた。

梅雨時期でもあることから、午後一時半に中学校へ集合し、開会式の後、

- 宇賀 銀が運ばれた道・一里塚跡・荒井峠
- 小童 須佐神社・正願寺
- 本郷 大山古墳群一号墳・原始時代の出土品

について実際に現場を見たりしながら、説明を行つた。

今回の史跡めぐりでは、初めて中学生からそれぞれの史跡について、『質問』を事前にいただいた。その中で、印象に残った質問をいくつかご紹介する。子どもらしかつたり、こちらが「うーん・・」と唸るような質問もあつたが、これらは秋の文化祭に向けて、甲奴町を紹介するスターを作成するための質問との事である。

銀が運ばれた道

- 三泊四日で銀を運んでいますが、どこに宿泊していましたか?

△回答△当時の制度で助郷といつて、通過する町村

が人馬や食事及び宿泊先の世話の負担していました。甲奴でも当時宇賀村と小童村があつて、それぞれ元気な人を選抜し、また当日は身なりを小ぎれいにするなどして、庄屋が村境で出迎えをし、村端まで案内した。



須佐神社

- 「ちいさいわらべ」はなぜ須佐神社に現れたのですか?

△回答△神社の鎮座と祭の始まり 小さい童が現れ、

て、神様を祀るよう託宣した。神様の現れ方の表現の一つと思われる。各神社の鎮座由来譚には、童児が出現託宣がある。(宇佐神宮・威徳神社など)

小童には神様が宿るといわれて、子どもが神様の代理となる祭礼もある。（八坂神社祇園祭など）



●備後風土記とは、どんな話ですか？

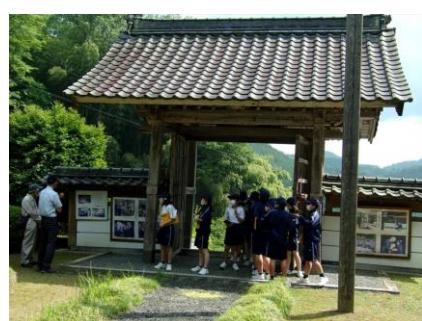
△回答△奈良時代の和銅六（七一三）年に風土記の編纂が始まるが、内容は地誌の編集であり、古事記（七一二）や日本書紀（七二〇）との関連性は薄いと思われる。

肥後、出雲など数か国が残っているが、備後国は残っていない。

鎌倉時代に書かれた日本書紀の解説本「釈日本紀」の中に、備後国風土記の逸文として、蘇民将来の話が載っているだけである。

正願寺

●大般若経六〇〇巻と須佐神社には何か関係があるのですか？



参考資料

甲奴町誌

小童村誌

ふるさとこぼれ話ほか

このお経は書写山円教寺版を購入したと思われる。

明治以降昭和の初めころまでは、虫送りの行事にお経を入れてあつた箱が一緒に参加したとのこと。

寄進の時期の明記がないが、発揮願主神宮寺時住潮音とあり、寛政一二（一八〇〇）年ころと考えられる。

寄進者について、広島県では世羅町・三次市・府中市・神石高原町・庄原市、岡山県

では、井原市・高梁市・新見市で当時の信仰範囲がわかる。

△回答△裏表紙の見返しに、備後州小童祇園社宝

物と書かれている。明治最初期に行われた神仏分離により、神社から正願寺に移された。慶応年間に祇園社の神宮寺が火災にあつてるので、大般若経は神社の建物に保管されていたと思われる。

原始時代の出土品

●土器はどのような場所で見つかるのですか？

『回答』住宅地整備や田んぼの整備などの工事現場で偶然見つかることが多い。

縄文時代・弥生時代に集落があり、そのゴミ捨て場跡に見つかる。

日常生活上で割れてしまったりとか、この時代祭祀の土器や土偶は、一回一回で割られて捨てられていた。

●土器と壺は何が違うのですか？

『回答』土器とは、粘土で形を作り、焼いて作った器のこと。

低い温度で焼くと、赤みがかった土器になり、高い温度で焼くと青灰色になる。祭祀や日常用に作られた。

壺は土器の中の種類の一つであり、食べ物を煮たり、種もみを保存したりして使った。

弘法山大山古墳群

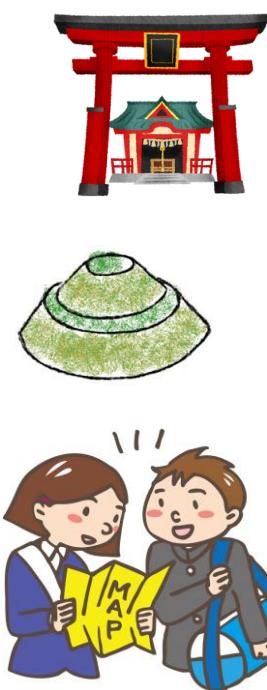
●甲奴にある古墳の中で、一番多い種類は何という古墳ですか？

『回答』きれいに残っているものでは、大山古墳群一号墳が大きいだろうが、石室だけしか

残っていないけれど、きれいに残っていたら、大山古墳群一号墳より大きかつたであろうと思われる古墳があるので、はつきりこれだとは言えない。

●甲奴にある古墳の中で、一番多い種類は何という古墳ですか？

『回答』甲奴で一番多い古墳は円墳である。円墳は、形が単純で作りやすかったのではないかと思われる。



甲奴中一年生 感想（一部抜粋）

- ◆たくさんの歴史を教えてください、ありがとうございます」と、「なぜ、自分は、甲奴について知らない人が多いこと思つていましたが、まだまだ分からないうちが多い」と「返づきました。
- ◆特に心に残つたのは、正願寺の鐘の巡つた道を聞いた時です。アメリカやイギリスといった所との交流が見られるからです。知らなかつたことを知れてよかったです。
- ◆私がすゞになあと思つたのは、銀が運ばれた道のお話です。四〇〇人で力を合わせて銀を運ぶのがすゞになあと思いました。私が大きくなつて甲奴にいても、いなくとも、ずっと甲奴を大切にしようと思つます。
- ◆古墳の種類が一番多いのは円墳で、その理由はつくりやすいからと私は予想してしまつた。そして、一番多いのが円墳で、理由がつくりやすいからや複雑ではないからという理由で、私が予想していことと全く同じでどうやらました。
- ◆「小さい童が來た」という話は少し聞いた事はあつたけど、他の事は初めて知りました。
- ◆史跡めぐりを通して「銀が運ばれた道」について、くわしくわかりやすくまとめ、まだ甲奴についてくわしく知らない人に教えて、甲奴の魅力や特徴をたくさん伝えていきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。

しくわかりやすくまとめ、まだ甲奴についてくわしく知らない人に教えて、甲奴の魅力や特徴をたくさん伝えていきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。僕が大人になった時には、今回のようないきたいです。

◆須佐神社では、たくさん絵がかぎりっていたし、古いのにまだ建物がきれいでした。正願寺では、鐘を鳴らさせてくださいました。礼儀も教わりました。すゞくいい体験ができました。

◆史跡めぐりを通して、ふねごとのみ力やぼうけんつながりなどについて知ることができました。アメリカス市とのつながりについて感動し、心に残りました。

◆土器などは、田んぼの整備や工事現場で偶然見つけることが多いと聞いて、おどろきました。

◆私は、また新たに自分の地域のことについて知ることができるました。

◆正願寺で鐘をならした」とや座禅を組むことができたことがよかったです。

◆自分が説明する立場になつたとき、皆様のように説明して、甲奴を教えていきたいと思います。



郷土誌「げいびグラフ」から 『ああ、懐かしの甲奴・・・』其の五

㈱菁文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料で、掲載させていただきました承を受けて記事をご紹介しています。

今回は昨年、今年とコロナウィルス感染症対策のため神事のみ行われた『ひちのぎおんさん』をご紹介します。

例年であれば、七月の初めに『水汲み神事』が行われ、第三日曜日から三日間『例大祭・祇園祭』が執り行われる。矢野の神祇に始まり、五〇〇年を超えた『おごっさん』を、みんなで力を合わせて武塔さんまで曳く。中日を挟んで二日目には、武塔さんから須佐神社に帰つて来られる。



◆水汲み神事



◆御旅所 武塔神社へ行かれるおごっさん



◆御旅所 武塔神社から帰つて来られた

おごっさん

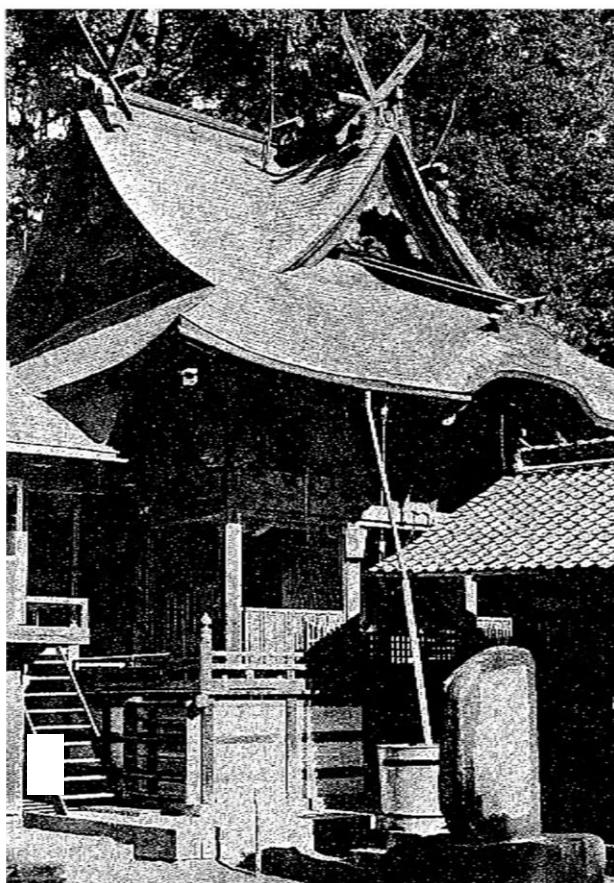
出典：すべて てくてくこうぬより



【ひちのぎおんさん】

これらは現在の様子であるが、では四年前の祇園祭の様子に思いをはせてみるとしよう。

昭和五二（一九七七）年第一三号 ㈱菁文社 「げいびグラフ」より



優雅な建築美を見せる須佐神社拝殿。



脇参道からみた拝殿。

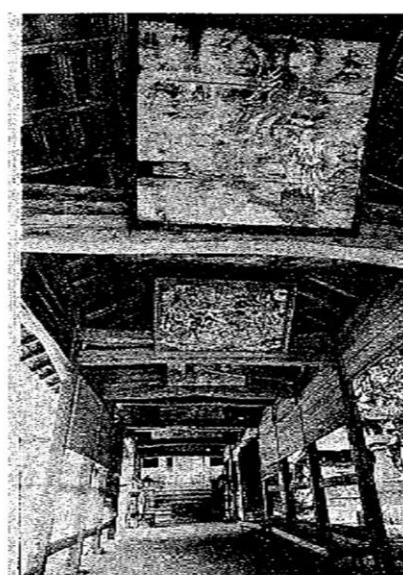
国鉄福知山線甲斐駅から西南約2kmの山あいに、戸数約270戸程の集落「小童」がある。正しくは甲斐郡甲斐町小童であるが、この小童に鎮座します須佐神社は「ひちのぎおんさん」として有名である。

素戔鳴尊を祭神とするこの須佐神社は、古くは祇園社と呼ばれていたが、明治に入って神仏分離令のため須佐神社と改称された。そもそも有史以前にさかのぼる古い大社で、その創建は明らかでない。社伝によれば「三代実録」貞觀3年(861)10月20日庚申の条に「備後國正六位上大神々、天照真良建雄神並びに從五位下、云々」とある。この天照真良建雄神の社が本社である。古来備後國總鎮守として数百の末社をもち、近世まで備後は勿論、広く近畿各地の人々より尊崇されてきたものである。

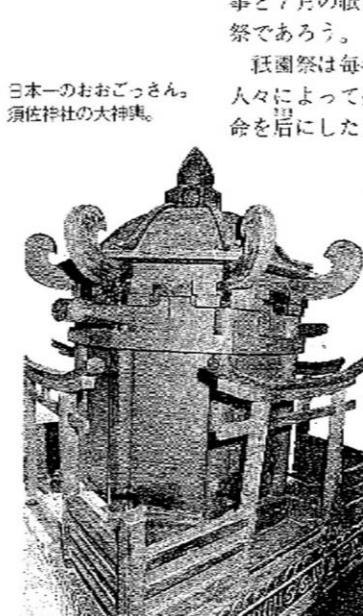
文錄3年、毛利輝元は備北鎮護のため社殿を再建造し、更に元禄9年(1696)藩主浅野家の命により修復再建して今日に及んでいるが、社殿はまことに優美な建造物である。

この須佐神社の神事に、正月の的弓祭、いわゆる弓神事と7月の祇園祭がある。何といっても圧巻は夏の祇園祭であろう。

祇園祭は毎年7月の第3日曜日から3日間、奉讃会の人々によって盛大に営まれるが、荒神素戔鳴尊が稻田姫命を後にしたという神話にもとづき、明治27年までは旧暦6月15日を中心とした3日間執行されていたが、現在では前述のように7月、数千の参拜者の見守る中を、羽熊の行列に獅子舞、囃子、屋台車等約200人



拝殿への道。奉納された扁額の数も多い。



大神輿は台車に乗せられて曳かれる。



かつて山伏が神儀に参加したときの名残り。



の供奉する神儀が歳齋に進められる。若者にかつがれた2基の御輿が、荒神素戔鳴尊を象徴して暴れ廻るのも勇壯で、真夏の山村に時ならぬ一大絵巻を展開する。

この神儀には、須佐神社に安置されてある八角長柄構え、台車つきの大神輿が御出する。この神輿は広島県重要文化財に指定され、全高3.4m、重量約3tもあり、永正14年(1517)創造され、246年後の宝曆13年(1763)に改修されたと伝えられる。

この神輿の祭神は素戔鳴尊の後の稻田姫命で、神輿の基盤の側面にある剣巴紋の模様が優秀で、この種の模様は藤原氏の氏神として尊崇された平安時代からあつたらしい。神輿の内部には心社があり、釘1本使わざ巨木の心材を使っているので、数百年たっても壊一つ喰わない。そして、牽引するたびに音を発する非常に珍らしい構造である。

寛文8年に三谿・三上・甲奴・神石・世羅の5郡からの寄進によって車にのせたことが古記録にあるから、それ以前は長柄によって神幸に奉仕したものと思われる。この神輿は第1日に本社から50m離れた武塔神社のお旅殿に神幸し、2泊して最終日の第3日目に本社へ還御する。この曳き輿は一般参拝者は誰でも曳かれるもので、これを曳くと厄払いとなり、願い事が叶えられて縁起がよいと古くから伝えられている。

ともあれ「ひちのぎおんさん」の夏祭りは、今に至るも盛大である。

雛太鼓を叩く女子も真剣だ。



若者にかつがれた御輿が暴れるのも勇壯だ。



矢野の神儀　由来について

鶴本 節子

須佐神社の例大祭・祇園祭に欠かせないもの一つとして、矢野の神儀がある。この矢野の神儀は、文明元（一四六九）年 麓城主綱時の奥書のある『祇園縁起』に、「六月十四日に、はた、つづみ、かねをうち、きやうむり」と神幸しゆ行、おたび巡に而ひじたるちんぎ、をなじ十六日ひつじざるのこく、もとのごんてん所江はいのふすと云々」とある。

宝暦七（一七五七）年の『祇園社由来拾遺伝』には、「同年六月十四日本矢野より、笛・太鼓・鉦等を打囃し、神を練めしより、其名遠近に聞へ」

天保七（一八三六）年書き留めの『小童祇園社祭式祭中行事定書』には六月十日御輿清シ役の条に

「右清シ水甲奴郡矢野村祇園井二参旧例云々」とあり、同十四日の条に

「御神事吹囃し甲奴郡矢野村ヨリ昼九ツ時打奉云々」とある。『西備名区』には

「御神事吹囃し甲奴郡矢野村ヨリ昼九ツ時打奉云々」である。『西備名区』によると、「この貝（ほら貝）はもと甲奴郡矢野の修驗者、昔祇園の神より賜はりし貝とて持伝へ、此神事にのみ持出て先駆セしが云々」と見えている。

また『須佐神社口伝』には、矢野に祇園神人多く住した旨記している。矢野は須佐神社の氏子ではないが、古くは以上の如

く数々の由縁のあつたことが知られる。それに須佐神社の祭神須佐之男命の伝説地も多くある。

矢野は古くより本矢野といわれ、矢野庄の中心地であった。多くの廃寺跡があり、多くの五輪塔は山伏・法印・行者の墓といわれている。山伏の子孫であるという家も多い。祇園社神宮寺支配の山伏修驗者が神儀の先駆者であつたと思われる。郷組の神儀道具を保管する佐々木家も先祖は山伏と言われるが、この家の数代前の六郎右衛門（天保八年没）の覚え書きに、神儀の変遷を書き留めている。これに小童祇園社の創建と神儀の始まりを宝亀五（七七四）年としているが、真言宗の神宮寺別当が宗派開祖の空海の誕生年を縁起とした付会の説である。室町時代には矢野神儀の原形はあつたものと思われるが、覚え書により江戸時代徐々に形態を整え、文政元（一八一八）年今の姿となつたようである。その後約百八十年間、信仰と伝統に支えられ今に伝承されたものである。

佐々木六郎右衛門書き留めにある矢野神儀の変遷を、時代順に要約してみると、次のようになる。

① 宝亀五（七七四）年に小童祇園社が鎮座になつた。昔須佐之男命が矢野の王堂にて休まれ、祇園水にて水を飲み給うて小童へ越された由縁により、鎮座後祇園社の祭りに矢野の村人は、竹の葉に短冊をつけ供奉するようになった。

② 天禄元（九七〇）年紙幟を持ち、神儀拍子を打ち始める。

③ 貞元二(九七七)年矢野を九ツ半に出発、八ツ半までに祇園社に到着することを定む。

④ 建仁三(一二〇三)年紙幟を縄に改める。

⑤ 正保五(一六八三)年竹の葉に短冊幟を、鶏の羽根に改める。

⑥ 天和三(一六八三)年郷組屋形を組み、中に入形を立てる。屋形は上方にてだんじりという。福泉寺先住・新屋小左衛門・野田(角屋)李兵衛・岡田徳兵衛・石屋長七が始めた。

⑦ 正徳三(一六八三)年郷組の神儀拍子は、渡り拍子であったが、福泉寺先住みつばん上人が京都より、しゃぎり拍子を習い帰り打ち始める。

⑧ 享保年中(一七一六)片屋に初めて屋形を組む。

⑨ 宝暦年中(一七五一)郷組のしゃぎり拍子を宇根にゆづる。

⑩ 安永十(一七七九)年郷組の渡り拍子を大神楽に改める。

⑪ 寛政十(一七九八)年宇根に初めて屋形を組む。

⑫ 文化九(一八一二)年郷組と宇根が屋形の前後を争い、小童峠の堂より祇園社まで、宇根が先行することになる。

- ⑬ 同年小田辺(芦尾)に屋形を組み、三つ拍子を始める。

⑭ 文政元(一八一八)年郷組に宿入を始める。

【芸態】* 神儀拍子

組別	宇根組	片屋組	郷組	芦尾組
道行き	しゃぎり	渡り拍子	大神樂	渡り拍子
休憩所	三つ拍子	三つ拍子	太極	三つ拍子
須佐神社	四つ拍子	四つ拍子	大神樂↓	四つ拍子
武塔神社(御旅)	三つ拍子	三つ拍子	太極	大神樂↓
			太極	太極
			大神樂↓	四つ拍子
			兩極→本極	三つ拍子

昔は各神儀組は宇根地区にて勢揃いし、矢野と小童の村境福王峠を越えて小童に入っていた。小さな山道を屋形・太鼓を担ぎ超えるのは難渋したようである。今は車にて各組毎小童の峠地区に集結する。祇園社まで一キロの距離である。

市場地区にて約百メートルは、古例により神儀練りをする。再び普通の道行きにて進み、祇園社門前町宮部に入ると本格的な神儀練りを行う。

太鼓打ちの小・中学生は、バイを振り上げ飛び打ちを始める。獅子は左右に荒れ狂う。宿入りの所役は、それぞれの所作を繰り返し一步々々と前進する。空に突き上げる羽熊の先の紙垂が白日に映えて美しい。流汗淋漓ものかわ一糸乱れず練りに練りて祇園大神に捧げ奉る。

『芋代官』外伝

鶴本 節子



◆矢野の神儀

出典：ポパイのブログより



◆羽熊の先の紙垂

出典：Goo ブログより

二二号へ掲載した、『げいびグラフ』の記事で杉本苑子著『終焉』と、二二号の『徳川吉宗から褒美をもらった有田村の名主』についての記事で、その時代、共通する人物として『芋代官』井戸平左衛門正明』が挙げられる。今回は『芋代官』に大きく関わるのある【芋・さつまいも】について調べてみると。

さつまいもは、どこの国のが生まれの野菜かご存知だろうか。

農林水産省のホームページで調べてみると、「生まれは熱帯アメリカ」だそうだ。メキシコを中心とする熱帯アメリカで生まれで、紀元前八〇〇～一〇〇〇年ごろには、中央アンデス地方でサツマイモがつくられていた。

紀元前二〇〇～六〇〇年につくられた、さつまいもをかたどつた土器も見つかっている。ペルー北海岸のあたりで栄えたモチー文化のものである。

日本では、一六〇〇年ごろ、中国からやって来た。琉球から薩摩に伝わったので、さつまいもとよばれている。中国から来たいも＝「からいも」とか、中国での名前と同じく、「かんしょ」ともよばれていたそうだ。

また『神儀を挙む』という人もあり、備北の人々に敬いと親しみを以て知られる格調高く入魂の神儀である。

氏子でもないのに一戸残らず参加し、年々歳々伝統を守つて奉仕していることは驚嘆に値する。

（出典：上下町誌より）

八代将軍吉宗のころに、蘭学者の青木昆陽(こんよう)によって全国に広められた。

この青木昆陽が國に広める二年前に、井戸平左衛門が伊達金三郎にさつまいもを持って帰らせ、石見に広め、享保の飢饉

から村人を救つた。



さて、話は変わり、江戸時代にさつまいもを使った料理の本が発刊されている。【甘藷百珍】という名前で、珍古樓主人といふ一風変わったベンネームをもつ人物が、寛政元（一七八九）年に出した一二三種類にもおよぶ甘藷（さつまいも）を使った料理を、一冊にまとめたものである。

導入以来、庶民の生活に根ざした甘藷は、主要な食糧作物として人々に認められるようになる。それとともに、料理の種類もふまえて、さまざまな工夫が生まれてきた。

この本では、一

二三種類もの

甘藷を使った料理を、【奇品】・

【尋常品】・【妙品】

【絶品】の四つに分類して、収めてい



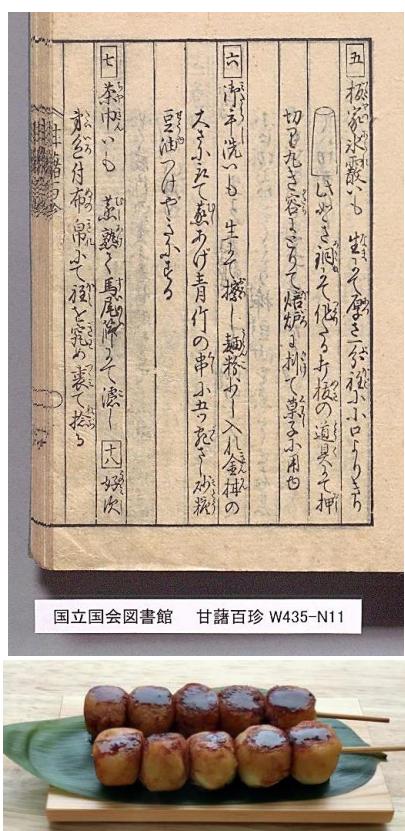
◆甘藷百珍：出典 江戸東京博物館

【絶品】究極の甘藷料理として、一一種類紹介

今回はその中から、【奇品】の【御手洗いも】を紹介する。

《御手洗いも》

生のいもをすりおろす。それにうどん粉を少し入れて、キンカンほどの大きさに蒸す。青竹の串に五個ずつ刺して砂糖しよう油をつけながら焼く。



◆御手洗いも：出典 COOKPAD

【奇品】には茶巾いも、【尋常品】には焼いもやいも雑炊、【妙品】には羊羹いもや加須低羅（かすてら）いも、そして【絶品】では田樂いもや「ふはふはいも」という、生いもを水にひたし、塩をべつたりぬりつけ、炭火にかけて蒸し焼きに。塩釜（塩を作るかまど）からかき出した熱い塩にいもを埋めて焼いたのは風味がとても良いと紹介されている。あまり手をかけず、そのままに塩を振つただけというのだが、一番美味しいと思うのは、今も江戸時代も変わらないようである。

国立国会図書館のデータベースで、実際の「甘藷百珍」を見ることができるので、見るだけでも楽しいと思う。

介

【奇品】 日本料理の手法を用いた、ちょっと変わったアイデア料理で六三種類紹介

【尋常品】 どこの家庭でも、よくふつうに作られた料理で、甘藷を使った一般的な家庭料理を二一種類紹介

【妙品】 味も見た目も、ともに優れている料理とされ、【奇品】の中から、特に味の良いものとして二八種類紹

甲奴の石造物紀行 Ⅱ 梶田・戸下Ⅱ



二二二号で、梶田郷にある石造物を紹介した。今回は矢迫線を福田へ向けて行く道沿いにある。東郷池を通過し、もう少しで福田が見えてくる場所に、立派な石垣があり、上に小さな建物がある。気を付けていないと見過してしまいそうなものだが、中には七つの石造物があり、お花が供えてある。



この石造物は、梶田八十八ヶ所の一部である。甲奴地区でも大師信仰の盛んな時代があり、弘法山の山名もそれにちなんだものらしい、山頂近くには大師像三基がまつられており、かつては二二日の大師の日には、多くの参拝者があつたと聞く。



赤い丸のついた石造物は大師像で、他の五体は一畑薬師などのようである。

一畑薬師は目に利益があるので、眼病平癒を願つて参拝させていたのだろうか。

屋根のトタン板も、お供えのお花もまだ新しく、地域の方が大切にお祀りされている様子がうかがえる。

もう一つ、福田下にある石造物を紹介。大乗寺、水越、四反田の三叉路にポツンとある道標。右へありだ、左へやすだと彫つてある。昔の人の温かみのある文字がないとかと思う。今でも、石の上に立つて、道案内をしている。



事務局より
・会員募集中です。ご紹介ください。

【お詫び】二二二号の『徳川吉宗から褒美をもらった有田村の名主』の記事で、徳川吉宗の生年の西暦が間違っていました。
誤：一七五一年 ↓ 正：一六八四年 お詫びして訂正いたします。

- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですのでお聞かせください。
- ・「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
- ・古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

☎〇八四七一六七一三五三五